文化

歴史

読売あをによし賞

文化財の保存・修復に多大な貢献をした個人や団体を顕彰する「第11回読売あをによし賞」の受賞者が決まった。72件の応募から本賞に選ばれた黒田俊介さん(73)（京都市山科区）は、襖や屏風の下地や外枠を、厳選した材料や独自の技法で製作し、国宝や重要文化財の修復を支えたことが評価された。奨励賞は、内戦で失われかけていたカンボジアの伝統的絹織物の復興に取り組む森本喜久男さん(68)（カンボジア・シェムリアップ）、特別賞は、再現力や耐久性に優れたコロタイプ印刷で正倉院文書など文化財の複製を手掛けた株式会社便利堂（鈴木巧社長、京都市中京区）にそれぞれ贈られる。

本賞　表装建具製作　黒田俊介さん 73

国宝・重文 陰で守る

襖や屏風などの障壁画を張る下地や外枠の製作に、大津市内の工房で取り組む。障壁画が完成すれば、自身の仕事は外から見えなくなる。受賞について「陰の仕事が認められたことは大きな喜び。多くの人のお力添えがあってこそ、晴れがましい賞をいただけた」と感謝する。

代々、指物師を営む家に生まれた。高校卒業後、父に弟子入り。「経営よりも、職人はまず仕事ができないと人がついてこない」。父の教えに従い、熱心に腕を磨いた。

当初は日本画の額縁を中心に製作。1978年頃、絵画や書跡の保存修理を担う表具会社「岡墨光堂」（京都市）から仕事を依頼されたのを機に、瑞巌寺（宮城県松島町）の本堂や二条城（京都市）二の丸御殿など、数多くの国宝や重要文化財の修復に携わるようになった。

「文化財の建具は、ただの骨組みではない。障壁画を長くいい状態で残すため、親切な仕事をしなければ」と材料と技法に気を配る。

材料には、縮みや脂分の少ない吉野杉の辺材を用いている。建具は、時間がたって木が縮むと、張られていた障壁画がたるんで傷むため、部材を巧みに加工して予防する。また、襖の枠の底にも敷居の傷みを少なくする独自の工法を用いている。

「細かい工夫は一見しただけではわからないが、結果は全然違ってくる」と自信をみせる。

2008年に弟子を取り、10年には伝統技術伝承者協会の理事に就任。後継者育成にも力を入れる。「文化財を守る一員なのは誇り。技術と共に、文化財保存の心構えや考え方を伝えるのが責務です」と決意を語る。

襖の下地を製作する黒田さん。「将来のことを考えた親切な仕事をしたい」と語る（大津市の工房で）＝長沖真未撮影

選考委員のコメント

池坊専好・華道家元池坊次期家元「日頃の地道な表装建具の製作で、文化財が保たれていることが分かる。このような分野に光が当たることは、とてもいいことだと思う」

谷口陽子・筑波大准教授「文化財保存は現状維持や後継者探しなど保守的だが、カンボジアで人を雇用したり、村を発展させたり、文化にはそういう力があることを示した」

中西進・国際日本文化研究センター名誉教授「表装建具など、まだまだ取りあげるべき文化財保存の分野があることを改めて感じた。今後、バトンを受け継いで走る人が出てきてほしい」

三輪嘉六・NPO法人文化財保存支援機構理事長「カンボジアで注目される遺跡ではなく、手工芸の支援に貢献している点が興味深い。住民とともに継承していることにも意味がある」

湯山賢一・前奈良国立博物館長「便利堂の技術は、法隆寺金堂壁画の写真をはじめ日本の文化財保護活動の原点。近年の日本の文化財の歴史を考える上でも重要で、賞にふさわしい」

田口晃也・読売新聞大阪本社取締役編集局長「賞の価値はどんな方を表彰したかで変わる。今回も読売あをによし賞の価値を高める、すばらしい人々を選ぶことができた」

奨励賞　森本喜久男さん 68

カンボジア織物に再び命

「自然素材が見直される時代になった」と話す森本さん（カンボジア・シェムリアップで）＝原田和幸撮影

「伝統の森」で布を織る女性

カンボジア・シェムリアップ国際空港から車で約1時間。荒れ地を開拓した織物の村「伝統の森」で暮らす。20年以上続いた内戦で消えかけていた同国伝統の絹織物を復興し、織物生産で人々が生活できるようにつくった村だ。「自然素材を生かした本物だけが持つ布の肌触りや風合い、美しさにひかれ、ここまでやってこられた」と話す。

京都で手描き友禅職人として働いていた森本さんは約40年前、カンボジアの織物と出合った。訪れたタイ・バンコクの博物館で、鮮やかな赤を基調とし、唐草風の大胆な文様と精緻な織りに目を奪われた。

1995年に国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）の依頼でカンボジアの伝統織物について調査。翌年、プノンペンに民間活動団体（NGO）のクメール伝統織物研究所を設立、絹織物の復興活動を本格化させた。

まず各地を巡り、熟練の技を持つ高齢者を探し出した。「彼らの『手の記憶』を呼び覚まし、伝統を掘り起こす作業だった」と振り返る。2000年にシェムリアップに移り、技術の継承に力を注いだ。

「伝統の森」づくりは03年から始め、「黄金の繭」と呼ばれる黄色の糸を出す蚕の飼育、餌となる桑や染色用の植物の栽培、糸引き、織りなど全ての作業を担う。現在、23棟の敷地に約80人が暮らしている。

「ここで一緒に生活し、仕事をする彼らが僕の宝。いい環境をつくることで、いい仕事ができる」。職人たちが織った布を手に、誇らしげに語った。

世界で唯一の印刷技術

コロタイプの印刷機で作業する職人（京都市中京区の便利堂で）

特別賞

株式会社便利堂

奈良・法隆寺の金堂壁画や正倉院文書をはじめとする文化財の複製をコロタイプ印刷で作り、1887年の創業以来、日本の文化財保存に貢献してきた。

コロタイプは19世紀半ば、フランスで生まれた。ガラス原板にゼラチンを塗り、ネガを焼き付けた版を作って印刷する。顔料を含む専用インクは耐久性が高く、色は鮮明で繊細な筆致の再現性も高い。

一方、版作りやインク量の調整は職人による手作業で、高い技術が求められる。さらにカラー刷りは1色ずつ版画のように重ねるため大量生産に向かない。このため、現在、カラーコロタイプの技術は世界でも便利堂だけが持つ。

象徴的なのが、法隆寺金堂壁画の複製事業。1949年の壁画焼損前に写真撮影して複製を作っており、壁画の復元模写を可能にした。コロタイプの原板となった原寸大のガラス乾板は、重要文化財に指定された。

また、正倉院文書や伊藤若冲らによる日本絵画の傑作の複製も作り、展示や研究に役立てている。

鈴木巧社長(51)は「長年の取り組みを評価していただけて光栄。コロタイプの技術を継承し、今後も日本文化の発信に貢献したい」と意気込んでいる。

海上交通の要衝 元就も重視

＊門司城跡

北九州市

源平の壇ノ浦幕末の下関戦争った関門海峡を九州北端の山城には、海上交通さえようと、毛友宗麟が激しじた。

山口の大内領毛利は永禄元年年）、貿易都市って大友の影響

江戸時代に朝廷の権威興に努めた光格天皇（在1779～1817年）関連する絵図と自筆の文が相次いで発見された。格天皇は譲位により皇位退いた最後の天皇。その像の一端を伝える資料だ。

絵図と文書はいずれも都の古書店が販売していのを、所功・京都産業大誉教授（日本法制文化史が見つけた。

絵図は、天皇の行列をいており、もとは巻物だったものが冊子に仕立て直されたとみられ、発見されのは、行列の前半部のみ